

いい人生とされてきていたのが当たり前の価値観として残っているところから、それに何がいいのって言える環境の高校だった。

語り手 中川 勝利（高校二期生 図書館司書） 聞き手 小寺 幸音

\*

フロントランナー ― 言いたいことを言えた中高生時代

― 学生時代の部活とかって何でした？

部活。一年生の時にだけSSH。今もある？

― SSH？

うん。スーパーサイエンス系の部活ってなかったっけ。サイテックみたいなやつってなかった？

― あー！サイテック。

まだある？

― あります。

それに一応一年間だけいて、ロボットサッカーの競技用のプログラミング組んだり、それ用に機体を作ったりみたいなことをやったけど、まあ、大会とかには出ず、友人と遊んでるような感じでやってました。で同時に、生徒会執行部に入っていたので、一年から三年まで基本的にはそっちの方に力を入れて活動してるような高校生でした。

― 生徒会は、なぜ入ったんですか？

中学、大津市出身なんですけど、その、大津の公立中学に元々通って、中二中三の時かな。一応一年間だけ中二の秋ごろから中三の夏ぐら

いまで生徒会入っていて、それが楽しかったのと、当時好きだった漫画の影響で。

― あはは。

新しい学校の生徒会活動が、すごく自由になんでもできるんじゃないかっていうのが思っていて、まあ、当時高校はできたばっかだったので、正確には市立の守女から移管されたばっかだったので、まだまだ改善の余地があるという学校自体色々作り替えていくというか、これから立命館守山はどういうふうな学校になっていくのかっていうのを作っていく段階だったので、そういう時に生徒側から「あれやりたい。」「これやりたい。」「って言えるのは楽しいんじゃないかなと思って入りました。

― ふーん。

実際楽しかったです。

― ええすごい。結構、生徒会って今もなんですけど、生徒主体なんで、今学校のルールとかがこの六月から変わったたりしてて、

あーすごい。

― あんまり先生は関与せずっていう感じだったんですけど。

それは、多分自分たちが入った年からずっとそう。

― へえ。

一期上の、それこそ立守に一番最初に入った先輩方が、元々地平線とかを新たに作っていくっていう意味合いの「フロントランナー」っていうふうに、「君たちがまず背中を見せるんだ。」っていうふうな指導が一期生の人らにはあって、自分ら二期生は、「それを見てちゃんと学んだ上で、それに追いつけよ。追い越せよ。」っていうふうな感じが当時あったので、先輩らが割と「これやりたい。」「あれやりたい。」ってで、

「これはちがうんじゃないか。」っていうのをちゃんと意見言ってたので、それを一緒に「そうだそうだ！」って言いながら。(笑) 自分らが先輩になって後輩ができた年とか三年になってからは、それをちゃんと実践していく？ みたいなところがあつて。自分らが入学した年に中学の一期生が入学して。立命館守山中学っていうのができたタイミングで。中学の生徒会はたしか自分らが高三の時にできて、当時の中学の執行部の顧問の先生と自分らでめっちゃ、ばちばちやりあつて。(笑)

―あはは。  
「だからそれをするから中学生甘えるんでしょー。」とか。  
―えー。

「高校に入ってそんなこと通用しないんやから中学の時からそんなに甘やかしちゃダメでしょ！」みたいなことをあの、ガンガン言い合ったりとかしてた。(笑)

―じゃあ結構校則とかって厳しかったですか？

―当時は意外と言われてた。

―スマホの持ち込みとか制服改造とか。

―うん言われてた言われてた。

―なんか持ち込み物とか色々。

―今どうなってるのかわからへんけど、毎月一回ぐらい頭髮検査あったし、髪の色ちよつとでも茶色やったら指導入ったし。

―ええー。

―髪の長さも「長いんちゃうか。」って言われることもあったし。

―えやっぱ前髪の長さとか叱られますか。

―あ言われる言われる。

―定規持った先生がいたり。

―ああそうそうそう。そんな今あつたら嫌やろ？

―それは嫌。あははは。

―そういうのが最初にあった。けど、それがおかしいんじゃないかっていう声がやっぱり挙がつたし、スカートも女の子普通に折ってた子はそら普通にいたけど、「それ流石に短すぎ。」っていうのとかで。

―まあスカートは今も言われます。

―言われるやろ？ それが折ってたら戻せって言われるし切ったら買い直して言われてたし。

―それも同じです。

―っていうのは当時からあった。あとその頭髮検査の時はあの、見せろって言われて「はい。」って。

―なるほど。スマホについてはどうでしたか？

―連絡とかあるから、実態としては先生ら黙認してたんじゃないかっていう気はする。一応なんか持ち込み申請書みたいなあった気がすんな。それ書いてたら持ち込んでもいい。ただし使うな。

―電源は切れて言われますよね。(笑)

―もし鳴ったら三ヶ月没収みたいな、なんかそんなやつた気する。実際の期間覚えてないけど一定期間没収されて使えへんくなるみたいなのがあった。で、授業中実際鳴らしたやつとかがそれで没収ってことはあった。知らんやろうけど昔ウイルコムっていうさ。

―ゲーム機的なやつですか？

―うんうん。携帯電話の種類があつて、そのウイルコムってやつやと夜間だけ通話無料やった時代があつて、今みたいにラインが全盛期って時代ではないので、所謂ガラケーと二台持ちみたいな子がおつて、そのうち片方没収されてもう一個あるし大丈夫って子もいた。そんな時代で

したね。

—なんか他に厳しかった校則とかありますか？逆に自由だった校則とか。自由だった校則なんやろうな。何してたら文句言われへんかったかな。

—頭髮検査とかはないですけど。スマホのやつも私が中二、中三の時にやつと電源切って持ち込んだら没収は無くなりました。

ほうほうほう。

—今、そうピアスと髪の毛を茶色限定で染めるっていうのはオッケーになつて。

おつきい。へえ。ピアスも問題ないの。

—ただなんかちよつとわからなくって。(笑)生徒の個性を尊重するけど、先生にも怒る権利はあるでしょうみたいな。

ちよつと言ってる意味がよくわからないけど、え、オッケーになるけど指導はされるってこと？

—されますねえ。

なるほどね。世の中のまだピアスに対しての一部偏見はありますのでっていうことを言いたいのかな。

—穴開けるのはオッケーだよとか。

はあはあはあ。クリスタルじゃないけど透明のやつなら問題ないよってことかな。ちよつと大きく変わってはいる。

—そうですね。

今いはるんなか。辻先生っていう英語の先生。高校なんかな。中学なんかな。

—辻先生。ちよつとわからないかもしれない。小森先生って知ってます？

ああ数学の。今高校やんな。うん。あの人是一年、二年度指導教員というか、一番学年の偉い人やな。

—えそうです。あの人はずつといるって聞きました。八木先生はわかります？

理科の。はいはいはい。わかるわかる。基本ニコニコしててうん。途中からマイワールド展開してついて来れなくなる人が出るタイプの面白い人やつた。そうね。八木先生もいはつたし、あと、森園先生(現副校長)是一年の途中から入ってきて一期生の一番最後の学年主任とかしてたんちゃうかな。で、自分らの代の三年の時の学年主任してはつた気するな。

—長いなあ。

うん。当時はね。今はもう教頭なつたって話やけど。

—なんか先生にまつわるエピソードありますか？怖かった先生とか好きだった先生とか。

怖かった。怖かったの種類によるけど、小森先生は怒ってる途中によくわからへん冗談言つて、笑つていいか笑つたらあかんのかみたいな感じの空気を授業中にシュシュってさせて、「お前ら今笑うとこやぞ」って謎の指導が入るっていう。(笑)

—あー。今と全く同じや。(笑)

くるやろ。そうそうそう。(笑)っていうのが小森先生やったな。ああ。あと、自分らがめちやくちやお世話になった先生で行くと、学年的には林先生っていう国語科の先生も、今教師すらやってないねんけど、その人はめちやくちや信者が出るくらい影響力持つ先生やった。物語文の読み方とかじゃなくて、実際の契約書とか文字の指導とかがあつて、それでもできるし物語文の指導もできるし、割と何でもできるタイ

プの能力高い先生で、話も面白かったな。

—えええ。それは好かれる！

うん。小杉先生ってわかる？

—あー。わかんないです。

今あそこ、京都の長岡京に行つてはる先生やねんけど、その先生の師匠が林先生かな。もう一人、松井先生。その辺が自分めちやくちやお世話になった先生やから、国語科の先生めっちゃ面白い人しかいいひんって印象やったな。

＊

なんか、勉強したことが全て生きる感じの職業だなと思ひます。→将来の夢を決めた時と現在→

—なんか国語も二つに分かれてました。言語文化と現代の国語ってなってるんですけど今。

多分カリキュラム的なのでそうなってると思うんやけど、当時は現代文、古文。高校生の卒論やりましようってのは我々ぐらいの代から始まつてるんちゃうかな。

—卒論？

えもう卒論ないの。

—いや聞いてないだけであるかもしれない。

高校三年生の理系も卒業研究やってたし。うん。文系も卒業論文書かへんと卒業できませんって感じ。

—大学みたいだ。

そうそうそう。書いた書いた。

—何文字くらい。

一万二千字から二万字。めんどいけど大丈夫。書ける書ける。何年前

やろ。自分が教員免許取るために教育実習きた時はまだ卒論やってたから、なくなつてるとしたらここ数年かもしれない。

—先生になりたくて取つたんですか？

全然。とりあえず取つとこうみたいな。理由があつて、自分今公共図書館で働いてるんですが、一番行きかったのが学校図書館だったんで、学校の理屈を学ぶためには教員免許取るしかないだろうって思つて、教員免許取つて、で、一応資格的には教員高校の国語の一種免許つてやつと、学校図書館司書教諭っていう、学校の図書館を使った勉強の仕方とかをメインで担当する先生が持つような資格と、図書館司書の資格の三つを大学の間に取つた。

—おお。すごい難しそう。

司書教諭はそんなによ。

—どうして司書になりたかつたんですか？

難しいこと言うねー。

—いつぐらいから将来のこととか考えたり。

それはとても難しく、昔から本を読むのは好きだったから、図書館というのは身近だった。幼い頃から使つていたけれど、高校ぐらいの時にはだいたい使わなくなつていて、本を読む時間も無くなつていた。さつき言つてたみたいに執行部楽しかったし。そっちに注力してたのもあつて、あんまり本を読む時間を取れなくなつていったけど。勉強は、図書館の勉強はしなかった。で、実際高校を決めたのは、大学入つて資格が取れるというのがわかつていたから。そう。高校受験の時点でその勉強はしようと思つていた。

—じゃあ結構早い？

うん。中三時点でもうそう思つていた。ただ、司書になれるとは思つ

ていなかった。何らかの形で図書館に関わったらいいな。本作るとかでもいいけど、そういう本にまつわる仕事があったけど、まあなれへんやろうなと思ってたし、実際民間に就職するんだらうなと思ってた。

けど大学四年の時に色々あって就職するのが嫌になって。で、その話を当時のゼミの先生に話したら、院に進学するという形で決断を後回しにできるよって言われて。じゃあ一旦院に行きましようということを決めた。で、院に行きました。

その院の間にゆつくり考えようって思ったら、姉が倒れて一年入院して。みたいなことがあって、このままモラトリアムをさらに延長はできないなって状況になって。じゃあ就職活動をちゃんとしなきゃいけないだろうと。そうなったときに自分も周りも納得する落とし所ってどこだろうなって考えたら、結局、図書館に就職するのが一番なのかもしれないなってところもあって、じゃあそれ第一志望という形でやってみるかと思って就職活動したら、運よく採用されたので、そのまま働いてるって感じ。だから、結構なりたくてなってる人が多い職種やし、一応自分もそうだと思うけど、それ以外絶対嫌だっていう熱量があったかって言われると疑問は残るかなって形かなと。

—今の職業、満足してますか。

楽しいよ。うん楽しい楽しい。一応そこそこキャリアも積んで来年十年目かな。(名刺を取りだして。)

—ありがとうございます。

はい。何かしらあったら使ってください。

—社会自然系資料室？

はい。というところにいます。副主査っていうのはなんかそれなりにすごそうな名称ではありますが、実際下から2番目です。まだまだ上があ

ります。で、調査相談課っていうのが今メインで仕事してるのがレファレンスっていう仕事で。

—レファレンス？

何かしら疑問があったりだとか、調べたいことがあった時に図書館の資料を使ってそれに回答していくっていうようなお仕事。何かしら調べたい。それこそ「学校の校則おかしいんじゃないの。」って思ってたえたいと思つたと思います。でもそれを「おかしいと思います。変えたいと思います。」っていうだけで学校の先生聞かへんやん。「いや他の学校もそうやし。」とか「それの何があかんのかを説明してくれ。」とか言われたりしますってなった時に、じゃあ他の学校の校則どうやって調べる？思いつかないでしょう。実際の学校に行つて聞いて回るのかとか言つたら必ずしもそれで答えてくれるわけじゃないし。そういうものを、世の中に出回っている本で載っているものがないか調べてみましようとか、そういうのをお手伝いするお仕事です。めちゃくちゃ楽しい。

—じゃあ、いろんな本がある中から選ぶ感じですか。

うん。こんな感じですかとかな。もちろん読むこともあるし、それをめっちゃ読んで、これの元になってる本どれだろうとかっていうの探しに行ったりだとか、さらにそれ書いてる人が論文書いてる人だったらその論文どんな内容だろうって戻ったりもする。なんか、勉強したことが全て生きる感じの職業だなと思います。

うちの府立で行くと社会自然系資料室っていうところと、人文系資料室っていうところの二部屋があつて、今喋っているその学校関係とかだとうちのフロアで、物語とか小説とか、或いはスポーツとか。言語学とか。そういうのとか、哲学とか宗教学みたいなのがもう一つの部屋。—やりがいありそうですね。

うん、めっちゃある。調べれば調べるだけ疑問点出るしね。楽しいです。

―図書館か。私も全然利用してなくて、やつぱり時間がないな。

わかる。忙しいよね。高校生は勉強して、で、受験勉強。うちの大学に向けては特になくていいとはいえ行きたい学部があったらやつぱり勉強しとかんと、上の方の成績トットカントっていう不安は常に付きまとうし。みたいなあるよね。

―今も高校って三コースに分かれていますか？

自分の時は別れてなかった。

―え。じゃあもうAMだけ見たいな。

アカデメイアかな。当時普通科って言ってたけど。普通に内部進学狙うコースしかなかった。

―へえ。じゃあその中で上から取られていく見たいな。

そうそう。上から行きたいところを自分で言える。

―成績良かったんですか？

どうなんだろうね。(笑) 一応行きたかった学部には行っちゃ、行きたかった専攻にも行けた。で、その時最終的に選んだのが文学部の教育人間学部ってところなんだけど、そこはうちの高校からの内部進学枠が三枠あって、2番目に少なかった。一枠目の人は理系コース。高校三年生の文理選択の時に理系やった人が文転して入ったんで多少加点措置があったって話は聞いている。で、三番目の人と私の間に百点くらいの差があったって話も聞いた。(笑)

―それ結構大きい。

悪くもないけどよくもないって感じかな。

\*

ぶつかり合うのも練習やと思つて。―語り手が今の私たちに伝えたいこと―

―結構ベタですけど、今の高校生にこれだけは言っておきたいことってありますか？

一生懸命勉強して一生懸命失敗したらいと思う。何事に対しても。うん。なんか下手に大人になる必要はないなと思う。それは当時、自分が高校生の当時に聞いたとしても「はあまた言うてるわ。」ぐらいな気持ちで多分受け取るだろうけど。けどそう思う。今の自分としては、失敗することに対して致命傷な失敗は高校生のうちはやつぱり少ない。その高校という範囲であれば高校生がSNSをやることでやる失敗は致命傷になることがあるから気をつけるよとは思うけど、デジタル達とかそういうのじゃなくて高校の中での勉強とか普通の行事とかその中でやる失敗は全然致命傷にはならないから、そこで友達とはぶられたと仮にしても、仮にね。そういうことが起きたとしても大学行ったらまた人間関係リセットされるし、高一と高二のタイミングでも案外リセットされるし。仮に別の高校になったとしてもそれがキャリア的にマイナスになることはないし、高校生としては今の人間関係が世界の全てにどうしても感じてしまうだろうけど、必ずしもそうじゃない。っていうのはこの年齢になつては思う。

―ここで最初につるんだグループって絶対変わりますよね。

変わる変わる。それで今も連絡取るようなやつもちろん出会いとしてあるかもしれないけどスレが全てじゃないのは間違いないから気にしなくていいと思うし。あとこの人とは一生仲良くできるなと思ってた人とはちゃんと関係性維持する努力はお互いにしなきゃ行けないなと思う。自分だけの努力じゃなくてお互いにね。それこそ授業サボって空き

教室でだべってた友人がいるんだけど一人は結婚して地元も離れとるけど、年一で少なくとも連絡はくれるし遊ぼうぜって言ったらそいつの住んでるところとかも全然行けるしみたいなことをお互いにちゃんと意識してるから友人関係が続いてるし、別の友人とかやと、そいつ今東京住んでるから自分が何かしらの用事で東京行くとんびに一応連絡入れて、空いてたらじゃあご飯行こうぜーみたいな感じでできたりするし。それは向こうがこつちに来る時だつて連絡くれるから、お互いに意識してやってる感じ。そうしないと大人になると友人関係維持するのが難しくなるの。やっぱり。

—確かに。

だからそういうのもなんやろ。ぶつかり合うのも練習やと思って。全部が全部うまく行くわけじゃないけど一生の友達になると思う人。そう思える人がいるんやったら、その努力はしていいんじゃないかなと思う。それは異性でも同性でも関係なくね。ここを乗り越えれば一瞬で終わる。そんな気がいたします。

—いいお話を聞きました。先人の知恵かも。

大人やったら割とみんな思うよ。でもやっぱ昔と今ってほんとに違うんだな。文化も人間関係も我々がおったときも陰口はあったし、殴り合いはなかったけど喧嘩はあったし。けどそれで決定的に何かがダメになるとかはなかったし。それでトラブルになったらそこからどう修復していくのかも先生らも実践せなあかんかったし。盛り上がっちゃってすいません。

—いいえいえ。いいお話を聞くことができました。ありがとうございます。

#### 【感想】

中川さんのお話を聞いていて最も印象に残ったことは、単に勉強するだけよりも「反抗したければ反抗して、同調圧力に流されないで」というメッセージです。私は今でこそ自分の意見を持ってノーを言える人間になったけれど、小さい頃は本当に自分の意思がなくて何事にも「うんうん。」と言ってしまふような人だった。だからこそ今回のお話を聞いて改めて過去の自分を殴られるような感覚があったし、改めて自分の意思があることがどれだけいいかを実感させられた。今回のお話を教訓として心に留めておこうと思う。



右：聞き手 小寺 幸音  
左：語り手 中川 勝利さん